

# 中国語・国際理解の授業におけるA L型授業の試み

野田善弘\*

## An attempt of Active-learning-based instruction in Chinese /International Understanding Classes

Yoshihiro NODA\*

This paper is a practical report that introduces Active-learning-based instruction in Chinese and International Understanding Classes. Active learning, which began as an improvement in university education, has been adopted in the new curriculum guidelines for secondary education and has lately attracted considerable attention. In this paper, I describe my experiences of Chinese lessons by Taiwanese, and explain the outline of the lessons that we practiced at Niihama Kosen with hints from the experiences. Finally, I discuss the future outlook about Active learning on Chinese/International Understanding lessons.

### 1 はじめに

本稿は、筆者が「初級中国語」および「国際理解」の授業において試行したアクティブ・ラーニング型授業（以下A L型授業と略す）に関する一報告である。はじめに筆者が、A L型授業に関心を抱くに至った経緯をここに記述したい。

筆者が、A L型授業に関心をもちしたのは、率直にいうと外からの刺激に反応したにすぎない。その動機は「外発的」であり「内発的」なものではない。もちろん、とくに高学年における一般科目の授業については、新居浜工業高等専門学校（以下、本校と略す）赴任当初から20年以上にわたって悩んではきた。高専生たちは、学年が上がれば上がるほど一般教養科目を軽視する傾向があり、いわゆる「チョーク&トーク」の「聴くだけ」講義では、彼らのモチベーションを維持できない。そうした中で、「アクティブ・ラーニング」という言葉が現場でもよく聞かれるようになり、本校でも教員向けの研修が開かれるなど、注目されるようになった。また、2020年度から本格実施された新学習指導要領において「主体的・対話的で深い学び」を実現する手段としてA L型授業が提起され、高等学校の授業編成の大幅な変更とあわせて、「学び」のあり方に大きな変更を迫ることになった<sup>[1]</sup>。このような外からの刺激によって、筆者はA L型授業に関心をもちようになった、もたざるをえない状況になったのである。

そうした外からの刺激の中で、筆者に特に影響を与えたのは、昨今の「アクティブ・ラーニング」ブームや新学習指導

要領の「主体的・対話的で深い学び」という教育界の要求を除けば、以下の2つの体験である。

1. 台湾国立聯合大学中国語教育実習生のA L型授業
2. 文藻外語大学中国語研修におけるA L型授業

筆者が試行したA L型授業について報告する前にこの2つの体験について簡単に記述する。後述のとおり、筆者が試みたA L型授業は、筆者の独創ではなく、上記の2つの体験から着想を得て、これに改良を加えたものにすぎない。

ところで、これまで筆者は「A L型授業」という用語を何の定義もなく使用してきた。アクティブ・ラーニングという用語は、最近では人口に膾炙して、改めて定義をする必要はないのかもしれないが、筆者が「A L型授業」について、どのような認識をもつのか、少しばかり記しておこう。そのうえで、上記の体験について記述し、さらに筆者が試行した「A L型授業」について論じたい。

### 2 A L型授業とは

筆者はアクティブ・ラーニングに対する専門的知見を有するわけではなく、定義を与える資格もないので、専門家の定義を援用するしかない。渡部（2020）は、アクティブ・ラーニングを「主体的・対話的で深い学び」と同義とし、「プレゼンテーションやディスカッションのようなさまざまなアクテ

ィビティ（学習技法）を介して、学習者が能動的に学びに取り組んでいく」ものと簡潔に定義している<sup>[2]</sup>。他の専門家の定義を参照しても、学習者が「能動的」であることが、アクティブ・ラーニングの基本的定義であることに間違いはない。学習者が受け身で聴く講義形式とは対極にある、学習者をして「能動的」ならしめる「学習技法」をもつ授業、それがアクティブ・ラーニングである。

溝上（2014）は、アクティブ・ラーニングを採り入れた授業を教授学習の概念として「アクティブ・ラーニング型授業」と呼ぶべきとし、これによって、講義かアクティブ・ラーニングかという二項対立を解消することができるとしている<sup>[3]</sup>。溝上が提唱するアクティブ・ラーニング型授業という呼称を用いて議論を進めたい。

要するに、筆者が考える「AL型授業」とは、教師が学習者に向かって一方的に知識を伝達するものではなく、教師が何らかの「アクティビティ（学習技法）」を試みることで、学習者を「能動的＝主体的」な姿勢にさせ、さらに学習者同士に「対話（話し合う）」する機会を与え、それを通して「深い学び（＝何らかの気づきや発見）」が学習者にもたらされるものである。

ちなみに「アクティビティ」として、渡部（2020）は、「リサーチワーク」「ディスカッション／ディベート」「プレゼンテーション」「ドラマワーク」を四つの主要な範疇として挙げている（これに「ウォーミングアップ」を加える場合もある）。また、「リサーチワーク」を他の三つの範疇の中心に据えている<sup>[4]</sup>。しかしながら、始まったばかりの初級中国語の授業では、リサーチワークは難しい。そこで、アクティビティについては、もう少し幅の広いとらえ方をしてみたい。宮崎（2017）は、「ライトなアクティブ・ラーニング」として「ペア学習」「ラウンド・ロビン」「ワールド・カフェ」など多くの技法を挙げている<sup>[5]</sup>。そうしたものも含めて、学生の「能動的」な活動を含む授業を「AL型授業」としたい。とくに中国語に関しては、教師が範読して、学生がそれを真似て唱和するといったオーソドックスなスタイルとは異なる、学生が「能動的」に活動するスタイルの授業を広く「AL型授業」と呼び、以下議論を進めていきたい。

### 3 台湾国立聯合大学中国語教育実習生のAL型授業

筆者は拙稿（2018）において、国立聯合大学の実習生と取り組んだ初級中国語と国際理解の授業実践を紹介したが、実習生が行った「AL型授業」について若干の紹介を行った後、初めて本校に海外からの短期実習生を受け入れたことによる学生の意識の変化と本校のグローバル化の可能性について論じた<sup>[6]</sup>。本稿では、実習生が行った授業を分析し、日本人の初学者にとってより効果的なアクティビティに改善する試みについて論述することを目的としている。前出の拙稿と重複するところもあるが、本稿の課題を達成するために、台湾の短期実習生が行った「AL型授業」についてここに記述して

おきたい。

実習生とともに初級中国語の授業において、複雑な文法事項の説明は筆者が日本語で補足を加えることがあるが、なるべく実習生には英語等で説明をしてもらうようにしている。「AL型授業」の特質を「能動的」とするならば、これも「アクティブ・ラーニング」と言えるかもしれない。何となれば、筆者が日本語で授業をするよりも、多くの学生が実習生の話す英語をなんとか聴きとろうと集中し、「能動的」に聴こうとしている様子が見て取れるからである。しかしながら、何らかの「アクティビティ」を伴うことをもって「AL型授業」とするならば、これはアクティブ・ラーニングとはいえない。以下、実習生が行った「アクティビティ」を伴う実践例を挙げよう。

実習生は、授業の中にゲームや競争の要素を多く取り入れた授業を行う。拙稿にも取り上げた「数字の聴きとりゲーム」がその一例である。中国語の数字を覚え、年月日の言い方を教えた後、それを聴きとる練習にこのゲームを用いる。学生を1チーム7人程度にチーム分けし、各チームから一名ずつ順番に黒板の前に立たせ、教師が言った数字や年月日などを、いちばん早く聴きとって正しくその数字等を黒板に書けた人にポイントを与え、チームで合計点を競うというアクティビティである。聴く力を養う工夫として競争・チーム戦という要素を入れることで、学生は意欲をもち、「能動的」に取り組む、非常に効果的な方法である。

聴く力を身につけるために、実習生がよく行うアクティビティは、2名の学生を登壇させて、どちらが早く教師が発音した言葉を聴きとれるかを競う対戦型ゲームである。これも競争を採り入れているため効果的ではあるが、1対1の対戦型は全員が参加できないため、対戦者以外の学習者は見学しているだけとなり、「無聊」の感が否めない。この方法の課題はここにある。「ビンゴゲーム」もよく行われる。学習者各自が数字をランダムに書き、教師の言う数字を聴きとり、その数字を消して行ってラインを作る。これは、学習者全員で参加することができ、かつ競技性もあり、有効な手法だと思われる。

以上は、初級中国語の授業において使用されたアクティビティである。次に国際理解の授業において実践したものを取り上げよう。実習生が行う授業内容は、毎年ほぼ同じである。

- ① 台湾の紹介
- ② 国立聯合大学の紹介
- ③ 台湾人の日常生活（食文化など）の紹介
- ④ 中国伝統文化の紹介

①と②は、主に「スライド（パワポ）＆トーク」となるので、「AL型授業」にはならない。しかし、台湾の夜市（ナイトマーケット）の紹介、特色ある食べ物や飲み物の紹介、同世代の若者たちの生活の紹介は、学生にとっては大変興味深いようで、講義形式ではありながら「能動的」な姿勢が見える。④については、剪紙（切紙）、中国結、噴墨など、クラス全員が実際に手を動かす体験型アクティビティなので、「能動的」な姿勢で取りくみ、楽しむことができる。これらは拙稿

ですで紹介したので、詳しくはそれを参照されたい<sup>[7]</sup>。

ところで、③の「台湾人の日常生活の紹介」も、「パワポ&トーク」のプレゼンテーションとなるが、その際に実習生はタピオカミルクティーをつくって学生たちにふるまう。2018年度の実習生は、それだけではなく、台湾のドリンクショップでのタピオカミルクティーの注文の仕方を学生に教えてくれた。それは、スライドを使って、言い方を練習するというものであったが、これをアクティブ・ラーニングに改良できるのではないかと筆者は考え、その翌年、2019年度の実習生とともに実践した。この「A L型授業」については、第6節で詳述したい。

国立聯合大学の中国語教育実習生が行う授業は、本校学生の評価も高い。年齢が近く、その感性も似ているためか、とても楽しそうで、羨ましいかぎりである。筆者もそのような授業を間近に見て、多くの刺激を受け、授業のヒントをも得ることができた。2020年度はCovid-19の影響で実習生は来日できなかったが、今後も短期実習生受け入れを通じた国際交流の取組を可能な限り継続していきたい。

#### 4 文藻外語大学中国語研修におけるA L型授業

筆者は、2016年度から本校の学生とともに宇部高専主催の文藻外語大学中国語研修に参加している。高専の参加者は1～3年生で、中国語の学習は未体験であるが、英語を交えて現地の学生たちが丁寧にお世話してくれるので、参加者の満足度は総じて高い。2016～2018年は、本校学生の引率を目的とする参加であったために3日間ほどの現地滞在しか認められず、授業を参観する時間はほとんどなかったが、2019年に2週間のプログラム全体を参観する機会に恵まれ、文藻外語大学で実施される多様なA L型授業を体験することができた。ここでは、筆者が関心をもったいくつかのアクティビティを紹介してみたい。

1つは、拙稿（2018）にも紹介したが、発音指導のアクティビティである。中国語のピンイン（母音や子音、声調記号）が書かれたカードを準備し、教師が発音した語のピンインを、カードを組み合わせて作るというものである。4人程度のグループを作り、いちばん早く正確なピンインを提示したグループにポイントを与えて競争をさせるものである<sup>[8]</sup>。このアクティビティは、ひと通りピンイン記号の読み方を教えた後、その発音の仕方を再度復習し確認するのに適していると筆者は考え、2019年度に改良を加えて、実践した。筆者が実践した授業については次節に詳述する。

2つには、「探し物」アクティビティである。たとえば「剪刀在桌子上（ハサミは机の上にあります）」という教師の指示を聴き、別室の机の上にあらかじめセットしておいたハサミを探しに行くゲームである。存在の表し方、「上・下・前・後・左・右・里（中）」などの方位詞等を定着させるアクティビティとして有効である。

3つは、「問路（道を尋ねる）」アクティビティである。まずは教室でキャンパス内のモニュメントや建物などの写真を

見せ、その写真の場所をキャンパス内を歩いて探し、探し当てたらその写真を撮影して教室へ戻る。キャンパスの各所にあらかじめサポート学生を配置し、その学生に道を尋ねて指示してもらい、「怎麼走？（どのように行きますか）」という道の尋ね方、さらに「まっすぐ（直走）」「右に曲がる（右轉）」などの言い方を習得する。「能動的」で効果的な手法である。しかしながら、このアクティビティは、教師だけではなく、多くの学生も動員して始めて可能であり、本校で授業に導入することは難しい。ほかに3名1グループになって、ひとりが目かくしをして、他の二人が「まっすぐ」や「右（左）に曲がる」などの指示を中国語で与え、あらかじめ設定した目的地まで案内するというアクティビティもあった。これなら、導入可能と思われる。

研修プログラムは、午前を、講義主体（もちろんアクティビティも一部入っている）の授業をして、午後は午前の講義内容を定着させるためのアクティビティ中心の内容となっている。椅子に座っての授業ではなく、活動させる仕掛けを随所に入れ込み、最もライトな「ペア学習」は午前の講義においても経常的に使われていた。

授業後は、1名の学生に2名のサポート大学生が配置され、高雄を観光したり、夜市に行ったりして楽しませてくれる。この研修に参加する学生は全くの中国語初学者なので、現地のサポート学生と中国語を使つての会話はできない。そこで片言の英語を使つてコミュニケーションをとっているのだが、思いを表現できない苦しみを幾度となく体験する。そして、自身の英語力の低さを痛感し、このままではいけないと感じるようになる。こうした「気づき」こそ「アクティブ・ラーニング」といえるのではないだろうか。この研修をきっかけに「トビタテ留学」に応募したり、別の海外研修に参加したりした学生もいる。先ほどの「問路」アクティビティを見てもわかるように、多くの現地の大学生がこのプログラムに参加してくれていて、「おもてなし」をしてくれる姿を見ることも、我々の日常に「気づき」を与える「深い学び」につながる可能性を秘めている。

#### 5 初級中国語におけるA L型授業の試行

ここからは筆者が実際に行った「A L型授業」について紹介していきたい。まずは、初級中国語で行った発音指導のアクティビティである。この着想は、前節で言及した文藻外語大学で参観した発音指導のレッスンにある。前述したとおり、グループに分かれ、教師が発音したピンインを母音と子音が書かれたカードを組み合わせてつくるものである。

筆者はこれに改良を加えて実施した。このアクティビティは、母音や子音などの発音の仕方を一通り教えて学習者がピンインを読めるようになったことを試験で確認した後に、発音編の復習として行った。授業の流れは以下のとおりである。

- 1 学習者（40名）を1グループ5～6人程度、7グループにわけ。
- 2 大きめの正方形の付箋とA3用紙1枚を各グループに

配布する。

- 3 付箋にすべての単母音・鼻音 (n/ng)・子音および声調記号を書かせる。
- 4 教師が発音した単語を聴いて、母音・子音・声調記号を組み合わせてピンインをつくり、A 3 の紙に貼って提示する。(図 1)
- 5 一番早く正解できたチームにポイントを与え、合計ポイントで競う。



図 1 発音指導アクティビティ

文藻外語大学の研修で実施されたアクティビティと異なるのは、傍線で示した 3 の過程を付け加えたことである。文藻の研修では、あらかじめ教師が作成したカードを配布して実施したが、筆者はまず学習者が母音や子音の記号を再度確認させることが、母音や子音の読み方を定着させるうえで必要だと考え、3 の過程を挿入した。これは中国語の習得とは関係ないが、3 の過程をなるべく早く行うように時間を設定して、グループで分担して行わせることも、リーダーシップ、さらには自己の役割を果たして他者に貢献する姿勢を養うのに効果的かもしれない。渡部 (2020 年) が言うように、アクティブ・ラーニングは、単なる学習技法に止まるものでなく、「自律的市民の育成」・「社会性のトレーニング」につながる<sup>[9]</sup>もの、言い換えれば学生のキャリアアップにつながるものでもある。その意味では、アクティブ・ラーニングは、すべての授業の中で取り組まれるものであろう。話題が逸れた。元に戻そう。

4 と 5 の過程について、実際の様子を記述しよう。正解が出るまで時間がかかるのは、単母音「e」の発音である。日本語の「エ」とは発音が全く異なるため、多くのチームが「a」と間違ってしまう。しかし、こうした試行錯誤を通じて単母音「e」の独特な発音を学習者に印象づけることができる。他には、「ian」と「iang」の鼻母音の区別を印象づける場合にも効果的である。「ian」の発音をすると多くのチームが「ien」という回答を提示するので、それが間違いであると指摘すると、試行錯誤しながら「ian」にたどり着く。「zi/ci/xi」の「i」の発音も特殊であるため、なかなか正解にたどり着かな

い。競争を採り入れ、グループで話し合っ課題を解決することで、「能動的」な学習姿勢が自然と醸成されていくのである。

絶対に答えにたどり着けないものもある。「アル化音(-r)」である。「r」は、「er」の「e」を省略したものである。単母音の「er」は付箋に書いているが、「r」はないので学生たちは右往左往している。最後はテキストに出ている単語なので探すように指示し、ようやく正解が出る。かなり「意地の悪い」やり方だが、「アル化」について印象が深く刻まれるようである。「-nr」は「n」を読まないなど、初学者にはとても難しい。しかし、難しさを実感させたうえで教えることは効果的であると思われる。

以上のアクティビティは、「発音編」の総復習として実施したものであるが、引き続き「基礎会話編」へ移行するので、この上にもう一つアクティビティを追加する。これは中国語の語順を知り、簡単な文をつくるという「造句アクティビティ」である。ちなみに、これは筆者が考案したものである。

- 6 5 が終わった時点で休憩を取り、教師は、その間に 4 で教師が発音した単語 (漢字・ピンイン・日本語の意味) を書く。(図 2)
- 7 日本語の意味を見て、動詞と名詞に分ける。
- 8 教師は、中国語と日本語の語順の違い、日本語が「主語+目的語+述語」の順に並ぶのに対し、中国語が「主語+述語+目的語」の順に並ぶことを説明する。
- 9 黒板に書いた単語の読み方を確認する。
- 10 グループで単語を組み合わせて、中国語の短文をつくる。
- 11 グループごとに順番に発表する。発表した文を全員で復唱する。

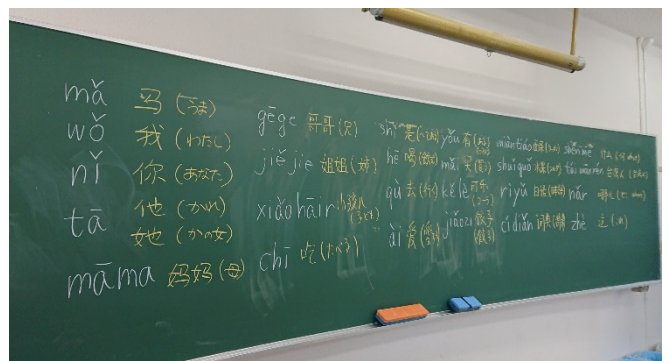


図 2 造句アクティビティ

「基礎会話編」への導入として、中国語の基本的語順を理解することが必要である。語順を理解し単語を配置すれば、言葉が通じるということを体験することが主な目的である。聯合大学の実習生に授業に入ってもらったとき、本校の学生が「日本人愛台湾 (日本人は台湾を愛している)」という文を作り、台湾の実習生は「ありがとう」と答え、クラスの雰囲気が一瞬にして和やかになり、打ち解けた。台湾実習生も来

たばかりで緊張していたと思うので、これは学生・実習生双方にとって実に効果的であった。次週から本格的に台湾の実習生に授業をしてもらう予定であったので、このアクティブ・ラーニングが、思わぬ形で「ウォーミングアップ」となり、学習者を「学び」に誘い込む契機となったのである。

## 6 国際理解におけるA L型授業の試行

第3節に述べたとおり、5年次に開設されている選択科目、国際理解の授業において、台湾の実習生は台湾の食文化紹介と題して、タピオカミルクティーを紹介してくれる。日本のタピオカブームの影響もあって、この「タピオカ・アクティビティ」を学生はたいへん喜んでいる。2017年度の実習生は、台湾の食文化紹介の一つとしてタピオカミルクティーを教えた。2018年度の実習生は、台湾のタピオカミルクティー専門店を写真で紹介するとともに、タピオカミルクティーの買い方を学生たちに教えた。筆者は、2018年度の実習生のプレゼンテーションを見て、これを学習者が参加するアクティブ・ラーニングにカスタマイズしてみたいと考え、2019年度の実習生と相談しながら、授業をつくってみた。

準備としては、ドリンクメニュー（図3）とドリンクをオーダーするときの会話文（図4）を作る。

| MEAU                         |
|------------------------------|
| 奶茶(Milk tea)                 |
| 珍珠奶茶 zhēnzhū nǎichá          |
| 布丁奶茶 bǔdīng nǎichá           |
| 布丁珍珠奶茶 bǔdīng zhēnzhū nǎichá |
| 綠茶(Green tea)                |
| 珍珠綠茶 zhēnzhū lǜchá           |
| 布丁綠茶 bǔdīng lǜchá            |
| 布丁珍珠綠茶 bǔdīng zhēnzhū lǜchá  |
| Size                         |
| 小杯(S)                        |
| 小杯(S)                        |
| Sweet                        |
| 半糖 bān táng                  |
| 無糖 wú táng                   |
| Ice                          |
| 正常冰 zhèngcháng bīng          |
| 少冰 shǎo bīng                 |
| 去冰 qù bīng                   |

図3（実習生成成）

| Order                                               |
|-----------------------------------------------------|
| A: 你好! 我要一杯小杯_____!                                 |
| Nǐ hǎo! Wǒ yào yībēi xiǎo bēi _____!                |
| B: 温度冰塊呢?                                           |
| Tiān dù bīng kuài ne?                               |
| A: 半糖/無糖・正常冰/少冰/去冰!                                 |
| Bān táng/wú táng, zhèngcháng bīng/shǎo bīng/qù bīng |
| B: 一杯小杯_____? 糖? 冰?                                 |
| Yībēi xiǎo bēi _____? táng? bīng?                   |
| A: 對!                                               |
| Duì!                                                |
| B: 一共是五十元!                                          |
| Yìgòng shì wúshí yuán!                              |
| A: 謝謝!                                              |
| xièxiè!                                             |

図4（実習生成成）

さらに、ドリンクの材料を準備する。2019年の夏、タピオカブームは最高潮に達して価格が高騰し、これまでのように十分なタピオカを用意できなかった。そこで、タピオカではなく、プリンを入れたプリンミルクティーをメニューに加えた。プリンミルクティーは、台湾のドリンクショップで販売され、よく飲まれている。飲料としてミルクティーのほかに緑茶も準備して、メニューのバリエーションを増やした。ドリンクの甘さとアイスの量を調節するためにガムシロップと氷を準備する。緑茶にガムシロップを入れて飲むということに学生は驚くが、中国・台湾では、砂糖入りの緑茶やウーロン茶は普通に販売されている。これも異文化体験と、甘い緑茶を学生に試飲してみるように勧めてみたが、残念ながら誰も挑戦しようとはしなかった。

それでは、以下、授業の手順を記述する。

- 1 学生に「ドリンクメニュー」と「会話文」を紙で配布する。
- 2 タピオカミルクティーなど台湾ドリンクの紹介をする。
- 3 会話文を説明し、注文のしかたを全員で練習をする。
- 4 学生は各自注文するドリンクを決め、オーダーの練習をする。
- 5 一人ずつ、中国語を使って実際にドリンクを注文する。
- 6 ドリンクを飲む。

配布されたプリントを見ながらであったが、店員に扮した台湾の実習生に、学生が中国語でオーダーし、ドリンクを実際に手にすることで、台湾での生活を実感することができる。今回は台湾の実習生が店員の役を演じたが、次回は学生たちにも店員に扮してもらおうと思っている。

学生たちの感想の中には、このアクティビティを通して「台湾で中国語を使ってドリンクを買ってみたいと思った」というものがあつた。本校には海外へ行くことにまだ抵抗を感じている学生がかなり多く、そのような学生にとって、こうした体験が海外に一步を踏み出すきっかけになれば、成功としてもよいであろう。

本校では、4年次に第2外国語を履修するが、ドイツ語と中国語のどちらかを選択するカリキュラムになっていて、国際理解の受講者全員が初級中国語を履修しているわけではない。初めて中国語に出会った学生も半分くらいはいたのであるが、この疑似体験を楽しむことはできた。同世代の学生と触れ合い、言葉を交わすことが、言語の壁を越えて、異なる世界の扉を開く。そうした異文化体験を講義の中に積極的に取り入れていきたい。

## 7 新しい「能動的」な学びへ向けて

2020年度、Covid-19の襲来によって、筆者が考案した「A L型授業」は実施できなくなってしまった。グループをつくり、対話を求める対面形式のアクティブ・ラーニングは、ウィルス感染拡大を防ぐことを優先すれば、しばらく封印せざるをえないだろう。されば、今後は、非対面（オンライン・遠隔）という形式で、学生が「能動的」にとりくむ教材をつくることや、あるいはウェブ会議システムを利用した学びにも積極的に取り組んでいかなければならない。対面式のA L型授業とは対極にある、非対面式アクティブ・ラーニングを模索していく必要に迫られることになった。

対面式にしろ、オンラインにしろ、アクティブ・ラーニングを行ううえで、環境の整備は必要である。科目の内容はもちろんのこと、受講者の人数や、教室施設の状況も、アクティブ・ラーニングの成否に大きな影響を与えるであろう。台湾の実習生が授業を行う際に、筆者が非常に難しいと感じているのは、中級中国語の授業である。中級レベルの中国語になると文法的に複雑になってきて、日本語で文法を説明できない実習生にとって、複雑な文法事項を学生に理解させるのは極めて困難である。そこで、授業科目内容を変更すること

にした。「変更することにした」といえば、主体的なプログラム改善のように聞こえるが、実はこれも外からの圧力による、やむをえない変更という部分もある。

本校では、4年生で第2外国語として初級中国語か、初級独語か、いずれかを選択することを必須とする。さらに5年生になると語学系選択科目として「実用英語・総合英語・中級独語・中級中国語・国語特講」の中から1科目を必須選択する。そのほかに5年次には自由選択科目として英会話と独語会話が開設されている。中級中国語のある語学系選択科目は、2020年度までは通年2単位の履修科目であったが、2021年度から半期（後期）2単位の学修単位に変更することが決定された。通年科目が半期科目になるので、それを機に自由選択科目に独語会話があるのに中国語会話がないというアンバランスな状況を改善し、前期に中国語会話を新設することになった。中国語会話では、ネイティブ教師が担当し、さらに台湾の実習生も参加させ、日常的な生活場面を想定した会話に特化した授業を行う予定である。中国語会話は自由選択科目なので、受講生は少ない。少人数なのでアクティブ・ラーニングを行いやすく、実践的な中国語会話なのでネイティブや実習生の能力をより活かすことができると期待している。

「新しい生活様式」が提唱され、「密」を避けてソーシャルディスタンスを守ることが求められる今、対面で授業を行う状況においてもインターネット環境を整える必要がある。現在、本校には無線LANが多く教室に設置されているが、2020年度時点では、教員と専攻科生の使用に限定され、本科学生の利用が認められていない。2019年度の実習生は、授業の中で教育アプリ（「Kahoot!」など）を使って、学生のスマートフォンと繋げて授業をしたいという希望をもっていたが、教室に設置されたWIFIの利用が学生に認められていないこと、すべての学生がスマートフォンなどの端末を持っているとは限らないので断念せざるをえなかった。学びを多様化するためにもネット環境を整備して学生が無線LANを使用できるようにしていく必要がある。また、端末について、貸し出し用に準備をする必要もある。

新しい「能動的」な学びに向けて、授業の改善と教育環境の整備に早急に取り組まなければならない。

## 8 おわりに

筆者は、中国地区高専中国理解・中国語教育研究会に2015年から参加し、高等専門学校において中国語教育に携わる有志とともに、高等専門学校における中国語教育のあり方や中国・台湾との国際交流について情報交換を行いつつ、さまざまな取組に参画してきた。本稿の「AL型授業」の開発もこの研究会のメンバーとともに行ってきたものである。毎年1回開催される研究会では、中国語授業改善や国際交流の取組などについて意見交換や情報共有を行ってきたが、2020年度の研究会の主題は、オンライン授業、教育アプリ、データの電子化など、オンライン・ラーニングであった。対面式授業と遠隔授業を比較し、その効果などについても意見交換でき

た。対面式授業を中心としながらも、オンライン遠隔授業教材を整備し、高等専門学校ならではの効果的な学習の確立に今後取り組んでいくことが合意された。今まで取り組んできた「理系学生向け中国語教科書」のさらなる充実、「理系向け中国語辞書」の作成など、ソフト・ハード両面から高専における中国語教育のあり方を研究会メンバーとともに検討していきたい。

2020年度は、聯合大学実習生の来日がかなわず、中国語の授業の楽しみも半減したが、何よりも学生が国際交流を楽しむ機会が奪われたことがたいへん残念である。各種海外研修も軒並み中止となり、国際交流は後退せざるを得ない状況である。2019年は海外研修に参加した学生、参加する予定だった学生数が合わせて50名を超え、20名に満たなかった前年度に比べ大幅に増加した。結局、Covid-19によって春の研修がすべて中止となり、参加実数は伸びなかったが、こうした学生の意識の変化を、何らかの形で補い、支持していかなければならない。現在のところ、聯合大学の学生が教えるオンライン中国語会話を企画し、まもなく実施予定である。これに限らず、今後は、オンラインで海外とつながる新しい形の国際交流も模索していく必要がある。

## 参考文献

- [1] 渡部淳『アクティブ・ラーニングとは何か』（岩波新書、2020年）15-21頁
- [2] 渡部前掲書「はじめに」
- [3] 溝上慎一『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』（東信堂、2014年）12-14頁
- [4] 渡部前掲書114-120頁
- [5] 宮崎猛『アクティブ・ラーニングの基本と授業のアイデア』（ナツメ社、2017年）20-31頁
- [6] 拙稿「台湾国立聯合大学短期実習生と協働した授業実践－新居浜工業高等専門学校のグローバル化に向けて－」（『新居浜工業高等専門学校紀要』第55号、2018年）45-50頁
- [7] 前掲拙稿、47-48頁。
- [8] 前掲拙稿、47頁。
- [9] 渡部前掲書184-186頁

## 附記

本文は、The 3rd NIT-NUU Bilateral Academic Conference 2019（台湾・苗栗）における口頭発表「Active Learning in Cooperation with NUU Student Teachers」（野田善弘、2019・9月）をもとに加筆して作成したものである。

また、本稿は、日本学術振興会・科学研究費補助金のうち基盤研究（C・一般）「理系学生用オリジナル中国語教科書に即したアクティブラーニングの開発及び事例集作成」（課題番号：18K00818 研究代表者：畑村学）の助成による研究成果の一部である。